

清水先生の思いで

石原孝哉

清水祐次先生は昭和44年に本学文学部講師として教壇に立たれて以来、31年の長きにわたって本学の英語教育のために尽くしてこられた。本年3月、停年を待たずに悠悠自適の生活に入られたが、わずらわしい公務から離れて、これまで十分時間が取れなかったトマス・ハーディの詩の研究、あるいは、思うにまかせなかった趣味の写真撮影に存分時間をさいておられることと思う。

先生は法政大学の大学院でイギリス文学、特にトマス・ハーディの研究を専らにされ、博士課程修了後も同大学の助手として研究を進められた。先生の恩師、故本田顕彰先生が清水先生の顔を見て、「もう清水君には教えることは何もない」と嘆息されたほど、トマス・ハーディの研究に打ち込んでおられたという話は有名である。本田顕彰先生は文学部の英米文学科に大学院を開設するに当たり、本学の専任教授となられたが、相前後して清水先生も本学の専任講師になられた。

私事になるが、私は昭和47年から数年間清水祐次、大川浩両先生と同じ研究室で机を並べる幸運を得た。当時は外国語部が文学部から分離して間もないころで、外では学生たちがマイクを持って集会を開き、内では若い教員が中心になって大学改革のために激論を戦わしていた。両先生はこうした喧騒を超越して、淡々と文学の話しに熱中しておられた。殊に大川先生はD・H・ロレンスの話になると夢中で、授業に遅れないかとはらはらすこともあった。清水先生は専ら聞き役で、いつもにこにこと私達の話聞いてくれたが、時々鋭い指摘をされるのが実に印象的であった。

耕雲館の後ろの今第二研究館が立っているところに野球部の合宿所があり、野球部が祖師谷に移ってそこを私達の研究館として使っていたのである。冬は

駒澤公園の砂ぼこり、夏はやぶ蚊に悩まされる研究室であったが、大川先生がご自慢のインスタントコーヒーを入れるとそれだけで、何か知的な香りが漂ったことを懐かしく思い出す。

その大川先生も先年鬼籍に入られ、清水先生はすっかり落胆されていた。外国語部も殺伐とした雰囲気にも包まれてはいたが、それよりも最愛の大川先生の突然の死が、清水先生には大変な衝撃だったようである。一心同体という言葉は両先生のためにあるといっても過言ではないほど二人は睦まじい仲であったからである。

先月久しぶりにお目にかかったときは、先生はすっかり元気を取り戻しておられた。悠悠自適の生活の合間に、たまには学校に来ていただき、昔話でもしながらゆっくりコーヒーでもご一緒したいものである。大川先生ご自慢のインスタントコーヒーにたっぷり砂糖を入れて、..

おくる言葉

丹 治 弘 昌

清水先生は法政大学文学部の助手をつとめながら博士課程を修了し、すぐその春、駒沢大学に講師としてむかえられた。以来、昨春まで長きにわたって英語教員としてその職をまっとうされたわけで、先生には実にさまざまな想いが胸の内にめぐって止まることがないことと御推察申し上げます。

私の記憶するところでは、清水先生は公けの場では自らの意見を述べられることは極めて少なかったように思う。しかしながら、大川先生を交えてのいわゆる茶飲み話では、細やかな観察眼から生ずる雑談の妙を発揮なされていたし、まれに発言される会議で、その静かな語り口のなかにシンの強さを周囲は感じ

取ってハッとすることもあった。また、先生はなによりも文筆家であった。雑誌の名前は憶えていないが、先生が幼き日の恩師を訪ねて帰郷する様子を書いた文では、なつかしさと面映ゆさの入りまじった心情が巧妙に綴られており、その筆力に感服するほかなかったことがある。退職後は、先生にとっては余生に過ぎないとおっしゃることでしょうが、折をみてわれわれの論集にも気軽に寄稿していただきたいとお願いする次第です。

清水祐次先生と Egdon

桑 田 禮 彰

私が清水祐次先生と、初めて親しく言葉を交わさせていただいたのは、駒澤大学に奉職してまもない頃、ご一緒に組合の代議員を勤めた折であった。この時は故大川浩先生も代議員に選ばれている。右も左も分からなかった私は、一年間、二人の英文学者から心暖まるお世話をいただいた。

同じ頃、外国語部の『論集』のバック・ナンバーをパラパラとめくっていた私は、創刊号の刊頭を飾る「閉ざされた世界としての Egdon」と題された論文を発見する。トマス・ハーディの傑作『帰郷』の見事な分析。その筆者が清水祐次先生であった。

私はこの論文を拝読したとたん、寡黙な清水先生にいつも感じていた静謐な情熱の住み処が見つかった、と思った。曠野 Egdon とは、清水先生ご自身にとって「浅薄にして傲慢なる時の流れの跳梁を固く阻止せんがための不動の砦に他ならなかった」のではないか。

私の中で、この砦は清水先生の暖かい笑顔とひとつになっている。

(2000年11月5日)

ご退職を惜しんで —清水先生の思い出—

熊 崎 久 子

99年もいよいよ鬱陶しい季節を迎えようとする6月9日、私の研究室にお見えになった先生から今年度をもって退職することにしたとお聞きし申し上げる言葉もありませんでした。

専任講師として共に駒沢大学の門をくぐられた盟友の大川先生も既になく、また学生の資質も大きく変わり、空しいお気持ちになられたこともありましよう。

先生はそこご経歴にも明らかなように、あらゆる場面で表舞台で晴れがましく活躍をするよりは裏方としてこつこつと地味な仕事を積み重ねることを旨としておられた方で、ご研究もお心の向くままにご自分流にゆるりゆるり淡々とされておられたと思います。その深いご造詣にどれだけ助けて頂いたか、計り知れないものがあります。難問、難題に行き当たりますと決まって六階の大川研究室のドアを叩きます、そこには必ず、清水先生がおられ、共々お考え下さいました。

寡黙で、物静かな方ではありますが、内には大変鋭い批判精神を持たれ、またご自身の確かな見解をお持ちになっておられ、思わず気を引き締められるということもしばしばありました。同期採用がご縁で30余年に亙るご厚誼を頂きましたが、時には師のように、時には先輩の如くに啓発して頂いてきました。定年を迎えるまでご在職頂きましたらどんなにか心強いことかと残念でなりません。

私個人の感懐ばかりではなく、学生のためにも先生にはご定年まで本学教授としてお骨折り頂きたかったと思うばかりです。

本学就任以前に教鞭をとられた学校の当時の教え子の方々が今もなお先生のためにクラス会を開き、懐旧の一時を過しておられると聞きますが、その長い歳月の経過を思いますとき、先生の真摯なご指導振りが何え、本学学生のためにもお引き止めしたい気持ちにかられてしまいます。

思い起こしますと、先生はご研究とは別にさまざまな方面でも実に多才でいらっしゃいます。能登の租院での研修、学会出張、その他プライベートな旅行など、大川先生ともども幾度かお供をさせて頂きましたが、先生の方向感覚は抜群で、辺地、僻地はもとより、複雑に入り組んだ町並みでも大抵の所は地図を一目ご覧になればたちどころにお分かりになり、ご一緒の折りにはただ付いて行けばよろしいという感じでした。

また発句の嗜みをお持ちで、折りに触れ詠んでおられたと思います。先生の犬好きは大方の知るところかと思いますが、愛犬「駒」が他界しました折りに一句ご披露頂きましたが、ただ感嘆の他ありませんでした。

更に思い出をたどりますと、ご郷里富士市の要望を受け、「ふじもと音頭」(唄入り)の歌詞の作曲も手掛けておられます。日頃の先生からはなかなか想像しがたいようにも思えますが、テープを通して流れる情感豊かな歌には粹人の赴きが感じられました。

ご退職後にはご研究の傍ら、多彩な趣味を生かされて悠々自適の日々を過ごされることと存じますが、ご教示を頂きたく、しばしばご門を叩き、ご静謐のお邪魔をさせて頂くことをお許し頂きたいと思っております。

清水祐次先生のこと

岡 崎 壽一郎

清水祐次先生が、停年に1年を残されて辞められました。同僚として、25年間を一緒に過ごさせていただきましたが、寡黙であられた先生と、親しく話しする機会はありませんでした。その先生が、1994年に、私がお茶の水の日本大学病院に入院したとき、大川浩先生とご一緒に見舞ってくださいました。その折のことは、今も有難く覚えています。その後、1997年に大川浩先生が亡くなられました。先生のご落胆は、私にもはっきりとわかりました。先生と私は、多分、今日まで違った時間を送ってきたのだと思います。そして、突然に、ご別れすることとなった、そんな思いがいたします。先生は、旅先で、何かのご縁でご会いして、そして、笑顔で挨拶されて立ち去られた旅人のような気がします。そうした懐かしさを感じられます。少こし、寂げな温顔の先生は、年月の経過を凜凜と生きた時の旅人だったと思います。長い間のご厚誼に感謝いたします。いつまでもご元気でいらっしてください。

思い出すままに

田 中 保

清水祐次先生がこの三月で退職され、もうそのような年齢になられたのかと、まさに「光陰矢の如し」のたとえにあるように、月日が早く過ぎ去るのに驚き

入っている昨今です。願れば、先生が法政大学大学院時代助手をなさっていた頃からの出会いに始まり、それから今日まで実に三十三年以上にならんとする永い歳月にわたって、何かとお世話になり心から感謝しております。助手として大学院の業務を粛々に行っていた大学院時代のお姿がなつかしく思い出されます。そうして奇遇にも、先生と同じ駒澤大学に勤務させていただくようになってからも院生の頃と変わらない態度で温かく接していただき嬉しく存じます。

先生はイギリス文学をご専攻でしたが、特に小説家であり、詩人でもあるトマス・ハーディの作品を中心に研究される傍ら翻訳もなされ、豊かな学識はもとより、博識であります。それを自らひけらかすタイプではないので先生のことを真に理解している方が少ないかも知れません。

先生の寡黙で、温厚で、控えめなお人柄に接するたびごとに、とても心やすまりました。その上、先生は誠実で信念の固い持ち主であるとおもいます。と一緒に教職員組合の代議員をしていただいた時期がありましたが、代議員会で意見が紛争し、その折、冷静な態度で、おだやかな口調ですが、外国語班の立場に立ってはっきりとご意見を述べて下さいました。代議員会の先生方も清水先生の毅然とした態度に圧倒されてしまったかのように、結局は外国語班の意見通りに採決され、思わず先生に拍手を送っていましたことも私の心の中に残っている一コマです。先生が在職中会議で発言されることは極まれでしたが、発言なされるときには、しっかりとした信念の下に、端的明快でした。

また、先生は趣味としてカメラがお好きで、私もその仲間入りをさせていただこうと、その道の指導格でもある小林亨先生、他界された大川浩先生ともども、小江戸川越を出発点として越生の梅林、黒山三滝の先の山深きお寺まで撮影旅行と洒落込んで出かけたこともなつかしい楽しい思い出の一つです。川越の蔵造り、喜多院の五百羅漢などをプロ気取りで撮りまくり、あとで出来栄を披露し合い、「田中さんが、写真部だったとは少しあやしいな？」と小林先生にいわれたりしましたが、(中一の時一年間だけでしたが本当に写真部だったのです。) 出来具合は私が一番よくなかったのは事実です。でも、楽しい

一日でした。

清水先生、ご苦労様でした。これまでのご厚情を深く感謝いたします。これからはご健康に留意されて、奥様とご一緒に自適の生活を楽しんで下さい。

ハーディと井伏鱒二と清水先生

町 田 尚 子

研究室は隣り合わせだったのに、清水先生とお話したのは数えるほどだった。切っ掛けはもう記憶にないが、井伏鱒二の『へんろう宿』を話題にされ、「いい作品ですよね」とおっしゃった印象が強く残っている。子供のころ聞いていた、遍路の捨子あるいは置き子の話と『へんろう宿』のばあさんたちが客人に遣う丁寧な言い回しが懐かしく思い出された。後に、教職員組合の随筆集『おあしす』で清水先生が描かれたご祖母様から、どういうわけか『へんろう宿』の三人の老婆が思い浮かばれた。嫁がず節操を守り、凜として、へんろう宿で育ててもらった恩義を遍路さんへの接待で返している老婆。さらに、清水先生の専門分野とされるトマス・ハーディの世界へと繋がった。短編『The Melancholy Hussar of the German Legion』は15歳の少年に75歳の老女が語った若き日のドイツ軽騎兵との悲しい物語だった。老女は運命の皮肉で、脱走するドイツ兵士と落ち合うことをあきらめ、射殺されたドイツ兵士の盛土だけの墓を守る。

『へんろう宿』は宿の隣に生えている浜木綿の葉の緑と黒い浜砂の対比で終わっている。その向こうに広がる海と波の音が余韻となる。ハーディの短編は老女の死後、墓守もなく、イラクサに覆われ、ほとんど平らになったドイツ兵士の墓の描写と「その近くに老女眠る」という短文で終わる。Dorchesterあた

りの小教会の墓地と石垣の描写から Downs の緑の起伏へと風景を思い描きたくなる。ともに、丁寧でいてきっちりとした描写、そして余韻。私の中で、二人の作家を繋ぐ清水先生。先生の随筆の描写の冴えに感服し、さらにいつも控えめな先生に今一度、頭を垂れる思いだった。

公的な場で清水先生はめったに発言はされなかった。しかし、入試の出題打ち合わせや教室会議などでおっしゃられる時、ご意見は的確だった。客観的で成熟した見解を示してくださり、また、先生の見方は謙虚さと他者への配慮に思いを致せという警鐘でもあったと思う。

ここ、第一研究館六階のやや西にふった南の窓から駒澤公園の四季の入日と同じような情景を清水先生と共有したことだったろう。先生とはお話する機会が少なかったがゆえに、印象深い。そして、大人の意見を的確に示す方がまた一人去られたことは、いかにも残念でならない。

(2000年11月)